

潤一郎あれこれ

内田巖画 谷崎潤一郎肖像 一戦中・戦後の谷崎と「細雪」

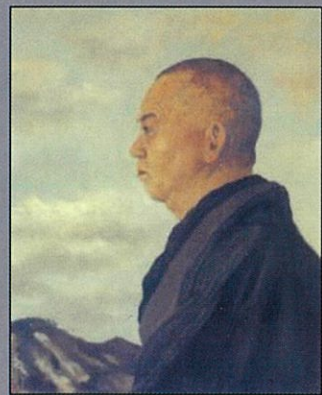
谷崎は三度目の妻松子と祝言を挙げ、足かけ三年居住した芦屋打出の家（現・富田碎花旧居、芦屋市宮川町）を離れ、昭和十一（一九三六）年十一月、神戸住吉川の河畔にある家（現・倚松庵、神戸市東灘区住吉東町）に移り住んだ。ベルギー人が建てたという和洋折衷の庭付きの家に、谷崎と松子、その娘と妹二人、お手伝いの女性たちという大所帯での居住であった。

ここでの生活をもとに、「細雪」は描かれた。平安神宮での花見や山村舞の会、蛸狩りを楽しむ描写など、数々の出来事として作品に反映させたものであった。

昭和十八年、『中央公論』にて二回発表されるが、緊迫していく時局に配慮し、掲載中止を余儀なくされた。翌年七月に上巻の私家版を上梓し知己朋友に配るも、当局を刺激し警察からとがめられたという。戦争が激化する中、谷崎はひたすら原稿に向かった。熱海の別荘に家族を呼び寄せ、さらに岡山県津山市、のち同県真庭郡勝山町へと再疎開してから執筆を続けた。終戦を迎え、昭和二十一年六月に上巻が刊行されると、戦後の物資が不足する厳しい現状を生き抜く人々の心を潤し、大きな反響を呼んだ。

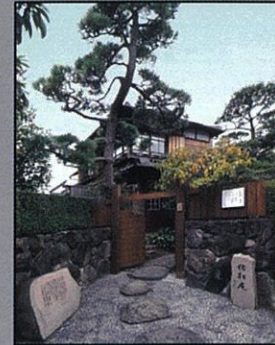
掲載中止の憂き目に遭いながらも創作熱を燃やし続けた谷崎。その姿に感銘を受け、同年三月四日、勝山町に近い刑部に疎開していた洋画家の内田巖がやって来た。内田（一九〇〇～一九五三）は、評論家・小説家内田魯庵の長男で、東京美術学校にて藤島武二に師事。戦前は帝展、新制作派協会を拠点に活動し、戦後は日本美術会の初代書記長を務めた。勝山町での疎開生活を記した谷崎の「越冬記」を見ると、二月六日に

当地の知人から内田のスケッチ数十枚を見るよう届けられ、「婦人の横顔ばかりなれども皆面白し」との感想が記されている。三月六日に描き始め、半日もしくは一日かけてポーズを取る日を四日ほど費やし、一週間ほどで完成したという。勝山町の山並みをバックに、谷崎の厳しくも堂々たる横顔を描き留めた肖像画は、内田のリアリズムの頂点を示したとも言われている。戦争をものともせず、自己の芸術に真摯に向き合う文豪の息遣いが感じられよう。



内田巖画「谷崎潤一郎肖像」
（谷崎記念館所蔵）

芦屋市谷崎潤一郎記念館 永井敦子



谷崎一家が暮らした神戸の倚松庵

谷崎記念館だより 2020

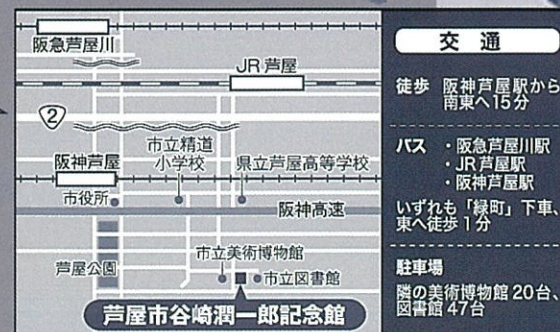
2021年3月12日発行

発行者 芦屋市谷崎潤一郎記念館

〒659-0052 芦屋市伊勢町 12-15

Tel 0797-23-5852 Fax 0797-38-3244

HP: <https://www.tanizakikan.com/>



谷崎記念館だより

vol.2 2020

●京都潺湲亭と谷崎記念館の庭園

京都下鴨の潺湲亭（京都市左京区下鴨泉川町五番地）は、文豪谷崎潤一郎が関西で暮らした最後の家である。六百坪（約二千㎡）もの敷地を誇るその豪邸は、下鴨神社の境内を縁どるように流れる泉川のほとりに今もある。隣には、川端康成が名作「古都」を執筆した「泉川亭」がたつ。泉川に臨み、鴨川の流れるに近いこの邸に谷崎が移ったのは、敗戦後の昭和二十四（一九四九）年四月。「潺湲」とは、水の流れる様を表す言葉である。谷崎の作品『夢の浮橋』（昭和三十五年刊）に登場する京都下鴨の邸宅「五位庵」は、この潺湲亭をモデルとしている。文豪がこの京都の家を引き払い関西を離れたのは、昭和三十一年暮れのことであった。

潺湲亭は近代数寄屋造様式の建築で、明治の末に建てられた。下鴨神社の「糺の森」を借景に池泉を湛えた日本庭園が、ひととき見事である。平安神宮の庭も手掛けた七代目小川治兵衛の系統とみられる庭師の手になる、その「回遊式」（眺めるだけではなく庭内を巡りながら楽しむ様式）の名園は、多くの変化に富んだ庭石が目をおどろかせ、池泉の静謐を彩る滝とせせらぎの水音は「潺湲亭」の屋号を裏切らない。池泉の周りには、母屋や茶室そして谷崎が書斎として使った離れなどが取り巻く。平安朝の「寝殿造」を思わせる、王朝趣味に溢れた谷崎好みの佇まいである。

芦屋市谷崎潤一郎記念館は、じつは、この京都潺湲亭をモチーフとした「数寄屋風」の建物なのである。もちろんその中庭も、潺湲亭の名園にならった風情豊かな日本庭園となっている。

谷崎は潺湲亭の庭をこよなく愛し、念入りの手入れを欠かさなかったというが、谷崎記念館の庭園も、行き届いた手入れ剪定の労にかけては本家に劣らない。その甲斐もあってか、春には谷崎お気に入りの紅枝垂れ桜、秋には紅葉が艶を競い、緑の夏・雪の冬もなかなか捨てがたい趣きをみせてくれている。そんな四季折々、ご来館の皆さんも、この庭で思い思いの歩みを楽しまれているようだ。

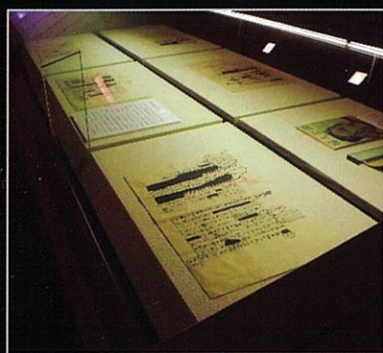
潺湲亭の庭の情趣を移した谷崎記念館の庭園は、文豪谷崎の美意識、その趣味嗜好を肌で感じ味わうことのできる、贅沢な空間なのである。

展示室

2020年度

● 秋の特別展 「タブー」 発禁の誘惑」

文豪・谷崎潤一郎の生涯は八十年に及び、作家としてのキャリアも半世紀をこえる。その間、時々の世のタブーと危うい摩擦を引き起こし、時に発禁の憂き目に遭いながらも、歴史の荒波と社会の転変を見事に掻いぐり、物書きとして生き延びてきた。



文壇デビューの頃の、若き「異端児」谷崎の過激な筆致は、作家としての挑発的ともいえる試行錯誤だったが、猥雑と不道德とをよしとしない当局の見過すところではなかった。やがて、そんな作家谷崎の軌道は、大正期のデモクラシーとモダニズムの社会風潮の高まりと共に鳴り、さらには煽動してもいく。

「痴人の愛」の引き起こした社会的反響とその新聞連載中断の事情には、そうした大正期の文化的潮流とともに、やがて来る「戦争の時代」の予兆も刻み込まれていた。

「潤一郎訳源氏物語」と「細雪」は、戦争の暗雲の下で執筆されている。これらは、まさに「戦時下のタブー」に触れるものだった。「源氏物語」では、巧みに当局の目をすり抜けた谷崎だったが、「細雪」は「自粛」というかたちでの発禁を余儀なくされる。

そして敗戦後十年、「老人の性」に脚光をあてた「鍵」は、「もはや戦後ではない」といいたが、性表現のタブーにまだまだ囚われていた昭和三十一年代初頭の日本に大きな衝撃をあたえたのだった。表現者ならば誰しもが直面するタブーとのジレンマ「発禁の誘惑」を通じて、谷崎の文学的世界が成熟していく事情を浮き彫りにした。



● 夏の特設展 「大谷崎と文豪たち」

谷崎は様々な文豪たちと交流し、創作の糧とした。明治末の文壇出発期から泉鏡花の作風に影響を受け、さらに永井荷風に「刺青」などを激賞され、華々しい文壇デビューを飾った。同世代の白樺派の作家・志賀直哉、武者小路実篤とは晩年まで交友関係を築き、特に志賀の文体を称えた。

大正期には、芥川龍之介の『羅生門』出版記念会に招かれたのを機に、芥川、佐藤春夫、久米正雄らとの親交を深めた。昭和初年に至ると芥川とは「小説の筋」を巡って論争するが、その最中に芥川は自死、谷崎は追悼文で早すぎる死を悼んだ。そして、佐藤とは妻・千代を巡って対立し、のちに千代と離婚、千代と佐藤が結婚すると、一大スキャンダルとして世間に衝撃を与えた。また、江戸川乱歩は、終生、谷崎作品を礼讃し続けた。

こうした文豪たちとの交流を示す自筆書簡をはじめ、追悼文、書籍などの資料と合わせて交友関係を紹介した。



谷崎の娘鮎子と佐藤の甥竹田龍児の結婚式
媒酌人は泉鏡花（昭和十四年）

● 冬の特設展 「初版本 on パレード ～名作たちのデビュー～」

「初版本」―その言葉の響きには、独特の緊張感が漂う。それは、名作たちにとっての、ただ一度きりの「デビュー」であればこそそのものなのだろう。「本」として世に出るまでが自分の作品、とのこだわりを持っていた谷崎の場合、自作の晴れ舞台への思い入れはとりわけ強い。凝った素材を使った贅沢な装丁による、念入りなドレスアップとメイクアップが施された初版本の数々。著名な画家による装丁・挿画が効果的な、「共作」ともいえるべき趣の本もある。そんな、贅沢な美術・工芸作品でもある初版本たちは、やはりそれなりに値のはる品物なのだ。また、様々なモノと比べて、商品としての「本」の価値がどれくらいなのかも、時代によって変わってくる。さらに、「古書」としての初版本はまた別物で、目を見張るような高値がつくこともままある。



谷崎潤一郎は、明治十九（一八八六）年、まだ江戸の風情の色濃い東京日本橋に生まれ、関東大震災を逃れて阪神間に移る。戦争を挟んで京都に転居、神奈川湯河原で最期を迎えたのは、昭和四十（一九六五）年、七十九歳の夏だった。その長きにわたる人生。幼年のあどけない表情に、徐々に陰翳が刻み込まれ、「文豪の顔」へと変わっていくさまを、多数の写真パネルに肖像画をも交えて展示した。

● ロビー展 「文豪の顔」

（秋の特別展）関連展示



文壇デビュー頃の谷崎



昭和二年岡本好文園にて



昭和三十八年喜寿の祝い

● 春の特別展 「潤一郎の美術展」

谷崎潤一郎は、美しいものをこよなく愛した。文豪ゆかりの絵画・美術品には、その美意識や関連する作品の味わいが滲み出ている。

傑作「細雪」の伝統とモダンの調和の美は、女たちのキモノ選びを描く小磯良平の佳作に見事に表されている。洋画家・和田三造の描く暗闇に浮かぶお琴と佐助は、日本画家による春琴抄より、谷崎が好んだものだった。谷崎一流の「陰翳の美」も、モダンの枠組みの中でそのものだったのだろうか。

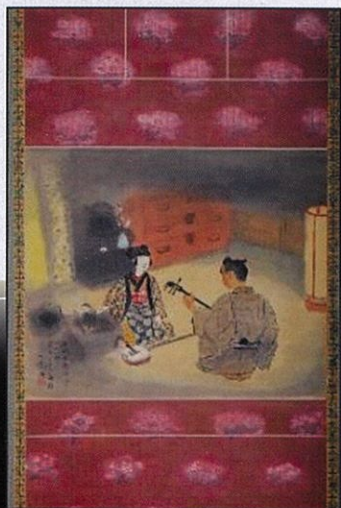
北野恒富「雪の朝」は、谷崎好みの王朝趣味溢れる美人画の逸品。軸の表装には、松子夫人のキモノが使われている。文豪には、画中の美女と最愛の女性とがオーバーラップして見えていたのかもしれない。王朝趣味といえば、俵屋宗達「源氏物語屏風切」は一つの極み。もと源氏五十四帖の各場面を描き込めた屏風から切りとられたという数奇な伝来を持つ大和絵の名品で、源氏物語口語訳に没頭していた谷崎が、執筆の慰みにしていたという。あわせて、日本画の錚々たる大家たちが谷崎源氏に寄せた挿絵の数々も、絵巻さながらの壮観さで見ごたえ十分。

棟方志功は、数多くの谷崎作品の装丁・挿絵に携わった。棟方独特の「板画」とともに貴重な肉筆画の数々も味わい深く、文豪との親交が触媒となった鬼才ならではの感性のきらめきが眩しく迫る。

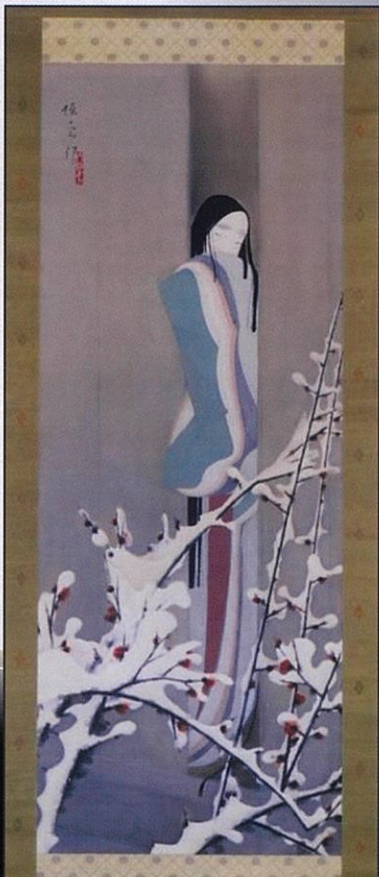
それは、谷崎の美か、巨匠たちの美か。いずれにせよ、その美の世界は、美しい夢へと私たちをいざなってくれたのだった。



俵屋宗達「源氏物語屏風切」



和田三造「春琴抄」



北野恒富「雪の朝」